海國兵談　三

Kitasato Memorial Medical Library
F
カ−4

海國兵談第十

地形並城制

地形ハ戦術之詳にせすんハ有へからす　險易順
逆等を知ハ良将ノ術也　故ニ地形ハ戦術之
已ニ小勢なりとも　能險に因て戦ヘハ大敵を挫
襲来ることすてに高きに居て敵を昇より来れハ
高きより昇るハ働き易き様なり　又大刀銃等
も高きより昇るハ施し易く　敵ハ拘角ヶ敷自
然と利多し　此外なりとハ兵巻ノ順を
増々枚挙しかたくして只其に依る也

慶應義塾大学医学情報センター　昭和47年6月22日
99.1
K
No. 698
富士川文庫
200

Kitasato Memorial Medical Library

○向ひとむかへハ逆之こゝに拒事なれ
○八達の地と云ハ所々と開けて四方の通
路有る地を云此所に陣するには千早
ま小高き所を見立て陣すへし　但高
き所二ヶ所ありて一ハ後に山ありて水の薪有し
ありて一ハ前の物すれハ乙山水薪を帯
ひたる所を要とすへし
○険とハ山坂岸嶮ニ嶺大水深泥等を云
あり　味方早く先へ向ふの地に囲ミへし
○詭出くも不利　味方出る不利ハ先を退西
難の地也　詭ハ味方を誘引する出る事なれ

ハ敵とるハ味方陣を堅めして引きに　詭勢
追来らハ詭勢なれハ彼の地へ出る事なく太兵
術を深て討るへし
大地形なる大略なり為工夫を待へし

城割　付　居館

○天ノ時ハ地ノ利ニ如かずと云ふて時日支干旺風
雨上なるハ天の時に於て勝へき理なる時を考
へ軍をする也　無也　地の固めに当てハ勝事不叶
とてハ地形ハ築ても地形を撰事　要也　一に云ふ
地形勝れる堅固ハ天造也　善請あれハ

別段に人弥の善悪を不知とも皆国家ともの
乃り是地の険を人和の代りに用ゆる事ぞ
地利を撰の大意也 地形の事 能々会得
有る可し
○易に地険ハ山川丘陵也 王公設険以守其
国とあり 然れハ地利ハ国家の宝なる事知
へし 此故に魏の武侯も美哉山河の固
是魏国の宝也と云へり
○城を築くにハ山と水とに因る事 山水
二ッなくてハ備ハらず
○城郭とハ内曲輪を城と云 外曲輪を郭と云

孟子に三里の城七里の郭と云も内曲輪外
曲輪の事也 城ハ以君を守る所 郭ハ以民
を守る所也 民とハ諸家中及百姓町人
迄総て云之也
○城制ハ日本異国千割殊也 千割殊成
不明
ことく郭を丈夫に構えて敵を守る所と
して 郭外ハ人数なく然る所に
及んでも城下の地下人商売等流浪して
逃漕る事なく上と共に郭を守り可ます
流ハ外曲輪と云ふなし 其ハ郭有りぬる

民をも不憐大なる害をしても害せざる者なし城下
此町民を騒動広大ならす故郎 則ち人
人家多して篭城の時ハ城下の地下人
富貴の類を八乗捕よすり故通元のまゝ
騒動出来して通途手立天らと然ハ暴徒
然して喧嘩の声街に溢る人多廣まらず故之
と無るし掴又其も無き太平民無為
故城下にハ六府の民も文代よ語る也
官人の外に常に保持伝居安不多し常
住の徒ふ故自ら商売も不多此故に
城下を鎮よ有しめて郎外よ企等

検に存る日平八郎備前相けるもに武士を
分強城下に役兵役なす故富貴の次第
に移安坐く町屋を造店也故城下に販
民広地く城ハ城城下ハ城下と別物に成
たり此故に篭城とあれは逃去人騒安
出来て同も常しれぬ騒動を生して
後軍記にいへるすべての事し二百年来
萬端泰平なる時節さへ騒動をとなす
況や此城下をや新く八民とらぐ
衣食絶と言信縁各絶類絶兵器なる
基候を禁して質朴を教へ兵備ハ計

如斯を以く積年漸々に日本咽喉の地と
計も想外川を建立仕候事人物は此條
に大事如何候ともに潔を悍て不華

○国主の居城ハ国の根本人民の仰く衆
服する所なれハ地形ハ勿論善き事も城に及
ぶ外に里見事也ハ廣大美麗を盡し造営
しで壮観を示す十ことも地の趣く
大平を致す御也

○支城並に居館等ハ其地之壮観を示す
に不及事之只嶮に因て暴を防くを主と

○古より四神相應の地を居城の府地とす
四神とハ青龍朱雀白虎玄武之 青龍ハ
水之朱雀ハ四之野開く廣平なる地を云
白虎ハ大道之玄武ハ山之前朱を尼青龍左
白虎後ろ玄武とて天然地形の輪か地
と云り思ふに山を後廣平の地を前たる水
を左運送の大道を右にしたる其一地
地理に於て甚手や因て其地理の輪かなる
所ならん

○平城ハ四方より敵を受く不宜之玄善
請と縄張も巧に為されハ損無し 但

天下を納る大堤ハ廣平にして輻輳地
遠く四方より参勤運漕の道路なる故
を貴ぶ往還修下ハ山々水々に因て行所
に築き便利とす
○山堤ハ殊に高みに築事なれハ人馬
の通行も自由なるよし之
○堤縄引に随ひ地形の模様によると云とも
古法意ハ此堤高地深きを云ふ文を記せ
し 然る地堤割するなり
○堤割ハ不残二丸三丸外川まで入る
跡の如く築立までありて免節地形

に随て三角まで 入るべきまで長く築置し
て築也 廣平の地に堤を云にハ先
おもき一方を取るとしく丈より 二三
の丸の外外川まで築を接る之
○堤前ハ国より大小ハ堤の遠近に不拘塗を
設へし 塗を設るハ或ハ関を主或ハ切通
或大坂或ハ船渡ホを造て率行ハ此難所
ほく一支さる也居る所に設置事く 又相
直に扉を設く一 扉とハ大切の場所
に大低まして 或切也を古文にて示
此時ハ和堤へ捍楽を喰止させ 又ハ

Kitasato Memorial Medical Library

遠境ニても急にしらする為之廣く云時ハ諸候
此國々ハ江戸此廉之箱根碓氷房川浦川
等ハ江戸此険之京若藩を以く云时ハ蓬谷柵
なとにて森前取なとハ険之角田白石水沢宮
戸等ハ廉なりても此険廉と一國の険
廉と又小強之とも心持ハ各別なるゆへ来て
知るへし

○江湖海中等へ築出せる塚ハ氷陸へ塚を
築もあり又水際より十間二十間引退く
壊去兵等を設もあり各塚を此ヨ畧して
なるへし

○狼煙場ハ烽火臺を設置て急ニ知らせ
時人数を集る為之烽火臺此制ハ山城
なるへく山此高き所に設平城なれハ櫓臺此様
に普請すへし高さハ三丈二三尺より四五丈之
臺とに方二間斗二三丈余に上此方
を細く塗込の室を造り内より竪を原
く附へし上をハ空虚にして明置へし
山にハ藁或ハ杉の葉なとを上をハ蓋を置
急なる時ハ火を懸煙を挙て人数を集る
なり但太平の日にても年々一度ツヽ急に烟
を挙て人数を集め烽火此稽古をと　圖

Kitasato Memorial Medical Library

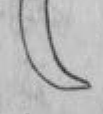
人に呑込七ゐ候し但太平ゟ日操練ゟ
烽火ハ駈付二十里目近を称して應兵
を與ゟ候し物ゟ以て紂王の所業に
御座なりれ又軍記見るに急ゟ合戦
ゟ時なとハ近急ゟ在家ニハ火を懸る遠
近ゟ味方に合戦始る事を知らせたる事
數多なりしゟの時ハ幾口も火を懸る事也
○堀ゟ外に十ゟ定ゟり一小地形ニ丈堀三に
堀の内に土居五に門六に馬出七に石垣八に
横矢の繩張九に柵乱落ﾕ十に水溜なり
又各一條每に修ゟ左ニ大畧ゟ記ス
○地形ハ上に云ゟ如く多載
○堀に二ゟり水堀乾堀也水堀ハ水面ゟり
ゟく十間より二三十間迄に堀下深さは
三四丈に堀下峯ゟき所ゟバ一丈に
四尺の積ゟ也但古ゟ作ゟ所ハゟ
ゟり急に堀ゟ也
○乾堀ハ竹藥研に堀之多得塚の方
を深く堀之○總く堀ハ泥ゟ深さを好水
深く泥深さハ形ハ好とす
○水多くことて水際なゟり石垣ゟする
事なり

○塀ハ土臺引ハ悪し　塀迄柱にすへし
石垣根接抱など若土臺引に為ル時ハ
石土臺に為すへし　矢狭間長く切尚
狭間ハ丸く切之を立狭間居狭間と高
鼻なり　立狭間ハ立人の乱切に為居狭
間ハ居て肩長に切之何れも内の方に
城りともを付る之　かるさとハ内の方を広く
塗事なり　又板狭間有り　単板に狭間を
切て壁中に塗込るなり
○和柱の外柱二ッ有り　第遠に有り　又
塀より四尺許内へ退て外に柱を立て
上下二箇所に塀柱より貫を通して　和
之を若とす　籠塀の時ハ上の貫へ板を
渡して塀外へ矢炮を放し　石打ると
すら足代に用る之
○塀の長さハ一面に石を落すへし　又急に塀
を立る時ハ礎なき地の立所を土中へ七八寸掘
据込ゆへし
○築地と云ハ惟ちに土を方四五寸長一尺許
に打固めたるを段々積上けすべし　へ煉
土を以て高サハ九尺の塀に作る之
○石多き国にてハ大石を累上ぬることも這

石をハ蝶去をもつて打固めて壊に及ん又黒
国なるものなれとも堅崩して易き患あり
志かれとも大石并黒石ハ黒国之
○黒国にて磚と云物を製して城壁石
垣なとに用る人手製好土を練て磁器のことく
火に焼て黒人其黒国なるものと云製たる
丁寧製法見出し又台湾府志を見るに安平
城の条に大磚桐油灰共搗て城を築く又五尺
広二百二十七丈となり又唐土西人の物語を以
して秦始皇帝の築く所万里長城ハ西ハ
流沙に起り東ハ遼東に至て長サも九千里

高サ十丈広二十丈にして土手の如き石垣にして
てあり一磚の大サ或ハ二三丈又ハ四五丈よも及
と云ハり妄りに聞ハ山西人の虚説の様なれ
ともも能大磚の製を考れハ好土を長城の形に
煉成して之に火を熱して焼たる物なる事ハ先
蒙作り工の妙に出るなるへし
○石垣に三等あり野面打決切合之野面
とハ生れ仍然石をて築きて者之打決とハ石の
角を打決て築くを云切合とハ空間なき様に
切合せたるを云野面打決ハ粗にして切合
を精とす各其築所に随て精粗の石垣

Kitasato Memorial Medical Library

を用ゆ　しかも大切の所は切合にして其
上に築く事なりといへども諸工人と得と
未だ民士に至る事を知る者なし
石垣は築城専一の士なれば志ある将士得殺
ずる事人加藤清正は石垣の名人と世に
云伝へなり豈是也
○又石垣の叩きあひに三等あり　下鐵鏤擇
出すなり　鐵は急にして如是なり　鏤は
如是之急ならず　擇出は 如是之
石垣の上際に椽の如く石を出掛る
を云ふ之　此垣は乗雑ともありとなり　朝鮮ニ

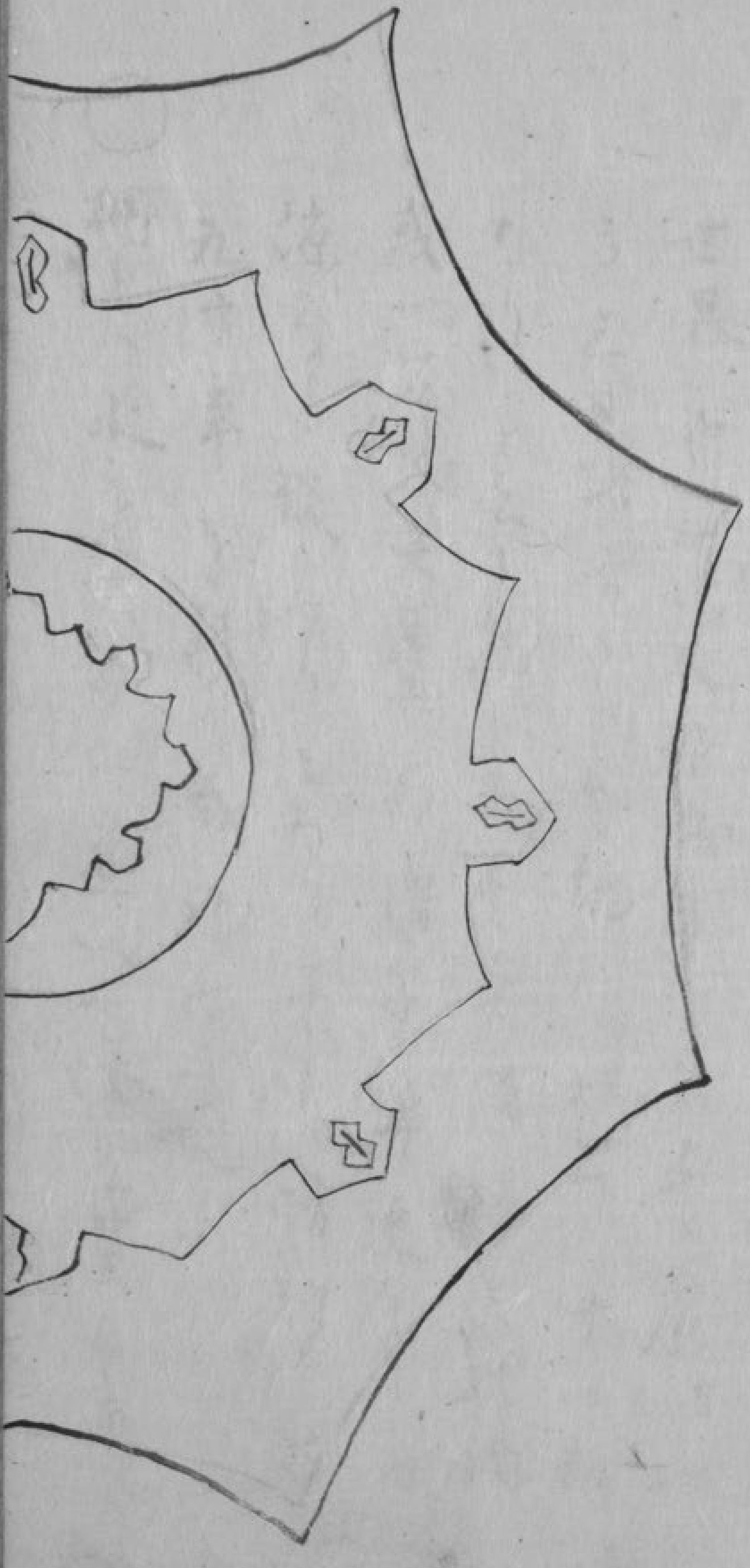
此様にも此石垣多しと云へり
○土居は堀の土を上て築く也　但土居
の高には根張十間なれば高サ五間と知べし
○土居は蘆（香）附麦門冬荒芝小茸此類を
植へて之土止此為之根立へは根を植るもよし
○土居へ鉢巻とて上此方に許石垣を
築事あり　土居の大小に随ふ事なれ共
大概六七尺内外に築也
○門に楼門あり　草門あり　楼門とは櫓門之
数々　城門は総形を有て二重門に造るを
好とす
Kitasato Memorial Medical Library

○郭の城門ハ出く坂となすへし 一向に草
地なれハ仕寄道具を隠すところの
なり
○二の門ハ内桝形 門外草門なるへし
○楼門の二階を扉より六七尺も持出して
道且窓 扉に格子を設けて扉の際より
敵に石を落し砂をかけ沸湯油汁木
を濯くへし 又焼草を積て火を燃す様子
なる時ハ多く水を濯き消すへし
○門の地敷の下ハ大石を敷置へし
○馬出に丸出角馬出栞馬出といふ出あり 丸ハ小口并

形向小口等あり 後しも口鉄にもあれ共 秘
訣の如くにして 及び家之馬出の縁意ハ只人
数の出る所を早く敵に見られぬ為 早く
敵に見られなハ 射すくめられて出かたき物也
○馬出ハ堀にするもあり 又土居にするも
あり 又土居にするも蔀にも置て割付すへし
○横(ヨコ)矢縄張と云ハ郭の縄張ハ直に長く
取草なれ 二十間ほと并出して 桐壁に
横矢の掛様に構ふへし 又比楼に向て
百間も百五十間も直に長く構る事あり
郭ハ二三十間程に鉄所も出に構へて横(ヨコ)

矢の備の縄張にすへし是ヲ縄張の法
意ヲ得ル是に於て新に地ニ六ヶ敷事を施す
品も多けれとも天地之奇妙の事あるも
はからず只横矢のこころを専要とす
○ケレイキスブツクに阿蘭陀を始め欧羅巴
諸国の城図多し其縄張も横矢を
専一と構なり其図の大略をこれに写す能
考へ見へし

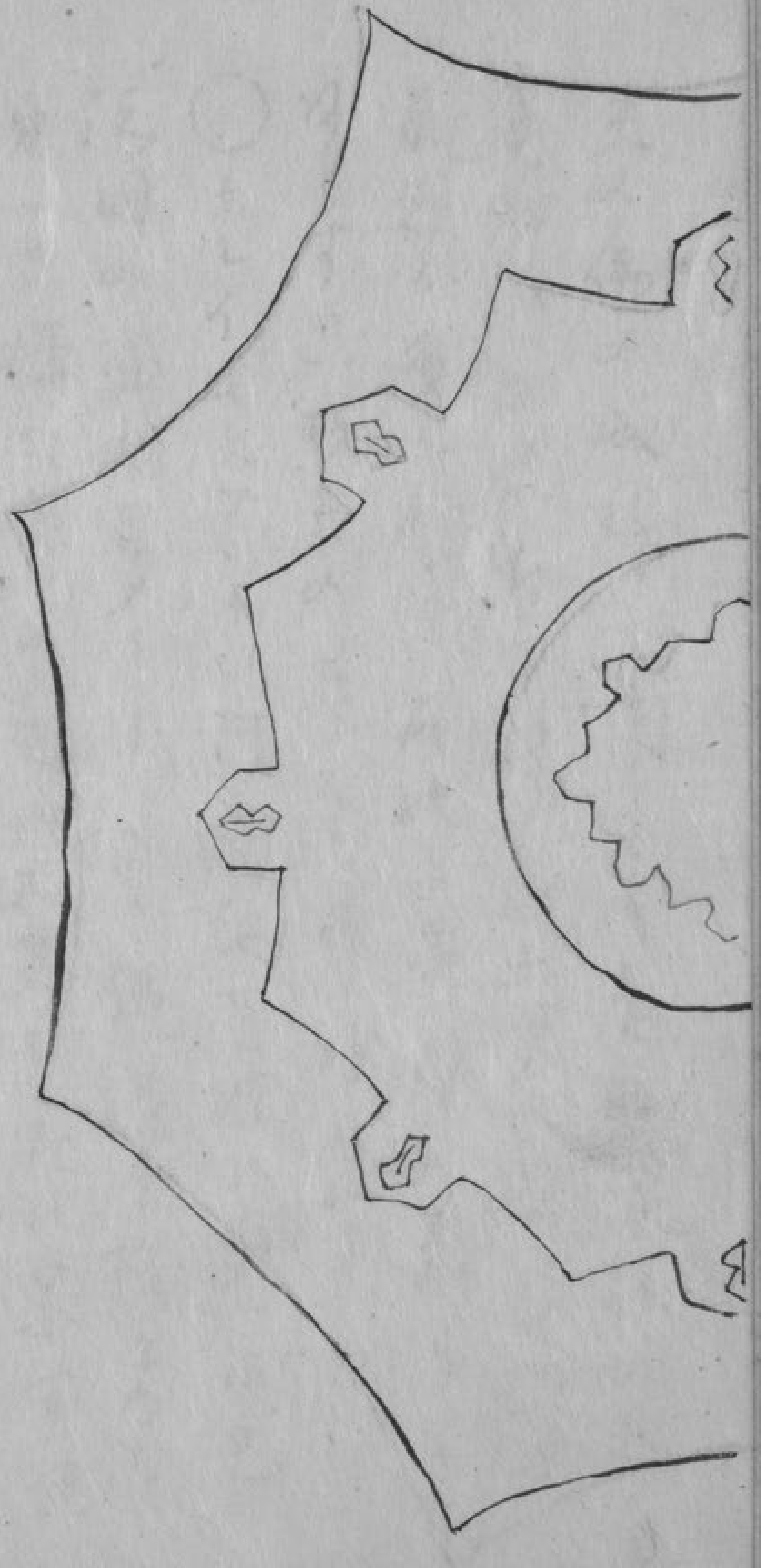
阿蘭陀流城池之圖



太図ニ出ス所ノ縄張大小城ハ意ニ変ス僅
ノ塁ニテモ此心持ニ居ル時ハ益多シ又
至極此大塚ト云トモ出ラサス此縄張ト
亜甲尼日多國ノ巴必塞ト云塚ハ
世界第一ノ大都城ニシテ其廣サ四
方三日路ナリ其總川ノ廻リ十ケ路
ナリト云トモ然トモ其善備横矢備
或ハ石火矢臺高櫓等錦連シテ
謀ナク敵ナリトモ其善備ニ百
九十年ヲ積テ城陥スルト

○

堀トハ水ヲ一面ニ並ヘテ塁ヲ貫キ通シ



Kitasato Memorial Medical Library

壺なり流落ハ行を溜返に仕合て埋立
盤く縄を以て結固め壺之節とハ葉林竹
なとの木枝にて垣を為流なり柵流落林
一ッハ地形堅固にして堀埆も不皮
所又ハ山林尾法或ハ陣営又ハ普請場
なとに用ゆ節ハ何すれとも見遁く無き
所に用ゆ之

○水溜く山城なとにてハ不自由なれハ湧清水
なとを溜壺為なり或ハ池を掘へ又ハ水樋を
設て竹へし　又清水も不出所なれハ水樋りを
拵多樹壺く雨降時屋庇或ハ池而を流て
雨水を一溜に溜とす之為へし　正成ら
赤坂し役なりとし

○穢水ハ又ハ糞汁近悪く溜壺く様へ随
敵に帰して行物へし日本の城割ヘ
不浄流して悪水を悉く流し捨ハ
よろしからす溜池地役壺を條て所を
流すへし

右城割の俗なりと云へとも此條にて　本朝
東海とてハ行すし置国
の城割法書に詳く見合て工夫すへ
し　然に害所ハ到極地大略にして

手遠と見すへき為なりとそ也
○陣屋塁居館皆堀の類にして堀
とも堀杭透をも設け出し等をも附れ
ともかふ足して普請簾相なれハ堀とは
云かたし 椒木なきもして大身なる土木なと居
所なり土居なと武士百貫以上ハ家中も多く
百姓も数多なれハ居館の権職張本も心を尽
て普請を致し非変節なき事なりしハ家
中百姓まても妻子家財迄ニ入て乳婦なとを
も碎させ 又ハ武をも張く捍 自らの敵をも防ぐ近
座し 又に國の扉となる事なり 急変し

至一城と言事ハ纔く國持大名と僅一二
城に不過 古ハ和漢ともに大國の諸侯ハ城を
三十も五十も構へる事練史に載なり 然後
に変ある時ハ相互に援助し少人持出張へる
ゝ国ゝ久く強なる事数多なり可見合之
夫溝を堀柵を張なる絆までも城と云なるへし
只國の大小深浅多少に因て普請の精粗
と大構と小構の差別迄の事なり 故遠國
の事ハ不知奥州なとの地にハ古昔以来 天正
なと迄此城千城と云し 址二三百ケ所
もありし 今其城趾を見に惟他私に便

Kitasato Memorial Medical Library

是て歩卒溝堀等を構又ハ柵を振或ハ
植木なとして門に歩許も杭遠ふを設たる
る事也と思ふ人も皆古代土着也武士
而ての征討に心を用て善清を致ふ時
ハ家中も百姓も一国に集て武を張り
たる事今も此心持に国法を立て武を
逞する事掌り逞する如なる十一　是れ
武を逞する事ハ聖人の道にして和漢
共差別なき事になす然るに武を逞く
する事ハ人を多くするにより人を多く
する事ハ武士を土着するにより武士土着

して人多き時ハ農を務鍬鋤を引して
国家の助力とをす此心持を孔子
も足食足兵と宣ひ又庶富教とも説
給へり偉なる人能知る処

Kitasato Memorial Medical Library

海國兵談巻之十一

城責并攻具

○城を攻る事ハ不得止事にして責る也

其謂ハ元来城と云ものハ地利に使り堀塀を設け敵をハ弓鉄炮にて防き道具にて拂近き敵をハ鎗長刀にて短兵にて打拂ひ切拂切伏んと堅固に構たる所へ外より仕掛く千城を落さんとする故人数も多く損傷し又國内の人民も苦む事也此故に城責をハ為さる筈也然れとも敵要害を

Kitasato Memorial Medical Library

如かれを早くして暴乱を足定するを
は捨る事も仕かかるまじきものなれハ不得止事して
攻るなり扨又攻る時に近くハ手術巧拙あり
然ふ呑込時ハ人数を損る故なるべく部を害
を引出す事あり損る人詳に會得すべし
○堀を責る事ハ数より其倍の人数あり
されハ攻られるものの人虽然時に困て小勢に
て不意に責掛り或ハ窓野なとに事多く後
詰攻なれとも仕難又ハ夜討なと仕難く城を
援事あれハ皆臨時の権変にして定法にはあ
らさる也

○攻と攻られさるとの差別をいハ責られるもの
ハ小勢なれとも己か国なれハ案内も呑込兵粮
水薪の便能く後詰の頼もあり責る方は
大勢なれとも他国の事なれハ万事不案内
にて後方の便利なく兵粮の不續事もあり
あり又長くなれハ流兵なとを得て味方割れ
する事なとも出来て勝利を失ふ故
以不便利なる事多し又籠城するもの
は必死に極る也人なる気も一齊く責る方ハ
大勢なるにつき城兵を侮り驕て油断し
出来るもの也籠城にハ籠城なる思入を

Kitasato Memorial Medical Library

呑込時ハ少攻るに拙筆ふ一方 ○是るふ
てく城を囲む事ハ敵より十倍も多人数
にて云趣事なれハ謀なく囲む事なれとも
然と一方を明置事ハ城を囲むなり
四方謀なく囲むときハ死地に陥り其城中
一致して必死の覚悟に守る時ハ其落城も
落兼る也此故に一方を不囲して城中の
気を緩る時ハ人散(サン)して城落やすし
其ハ敵将を見に不趣只城を奪ひ地を略すると
事一と言時の事也又敵将を不討ハ勝に定め
ざる合戦のときハ城中に敵将始悉に生を免(?)

時なしハ四方一寸の隙なく云囲て城共に力尽にな
城中を塵金にして根を断葉を枯すなるなり
草干なり讒の言ふ状を白章統に云囲しも此是
なり然とも草干無兵粮陣平に敷れて高
状と云難しなるとなし
○城を責るに數の心得あり敵弱く粮米も
ふ足して後詰の気もしなき城なるハ前囲
く兵威を示し不動に待合く城を後
しと云を令して夜討などふ仕掛け其
して囲時ハ力無ふ責して城落ると云て
○敵強く粮米も多後詰も一来城あらは

Kitasato Memorial Medical Library

経兵乱にて費紙遣ひにすれハ内外なり候
ことく大なに新を読事なり此物に急
しく其術なりし見ゆる時ハ速に田を
掃て道本もなり其宜の術にとるへし
山燒なとハ表面地を焼き丈夫に構て
後山を掘て其清も以て其後焼子
なとハ前より手動とく費掛り別に人數
を後焼山へ出し其より掛りして功ら
すも省くへし
大しハ外燒にとり歟にとり勢多少を
考て猶焼責功なるへし葉帶に離

かくし　多軍紀を読て自極焼所を探
るへし
○燒中の諸策にて其手に日数を送り
すへき者に種々焼其器を施す事有明
に察して其本来るへし
○敵地へ踏出る時ハ村里の人民年兵乱
妨を恵て家財妻子を引纏ひ道路へ迷れく
足忘れ足根をとめあり敵方に敵地へ踏出
軍兵乱妨を前に禁し國民へ指とさし
也故中にはすへき事人民ハ迷ひ隠れた
るハ所々にこもれるを建て叢叢軍士の乱妨ふ

Kitasato Memorial Medical Library

作法を禁せられ早〻立候て征伐せらるゝ云〻
を書付す若遠方にして訊詰するとも
ならハ其所に集會して其地の人民に
あはすべし如此なれハ敵國の人
民信服して其地の清正此所を巻
出なる也に朝鮮の人民親附して軍
士を親く交故清正の軍勢ハ陣中に
来る久来なりしに及て清正の軍
法を貴へし　○城を囲んとする時ハ後詰の
来るべき節を考て別備を設押の人数
を置て其後城と云巻十　○城責

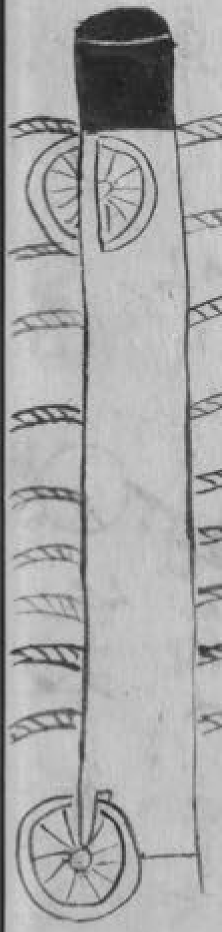
の時向城を二三ヶ所に立車之其善将馬
諸将旗を振り亂旗を振りて事足る事也
備を當に置へし云へし　○城近く押詰
ては沖断するなれば難渋の一戦危角
否残の一軍にして引篭なり此一
戦は太平を致し其已近電せさるゝ
運用の軍なれは一延を勤ること専とも
云へり
○城近く陣を張るは城と陣との間に森木
あるは其ハ手張に陣すへし　城より直に
見透所ハ大筒の氣を附り　○城を陳ずる

Kitasato Memorial Medical Library

又ハ定法なしと云ともきハ五六町をき
八十四五町あるへし　其誤塲に付て捧す
る時ハ能く相見を定て訳織の様子を伝を
をしむへし　○塲具ハ法當時磔罪家の
侍技等の攻具殊に不足なり器用の術
絶めて所ゝき事あられハ侍技交なる攻具し
外ゝも往書籍を考て耕簡の上塲紀の果
又ハ普請の巧拙等に因て制作の前事良
將は其巻と云之　○塲具ハ門を破り塲を倒
しみ垣を堀崩に用ゐられハ破に付さるその
なり　此類に先仕掛道具を制すへし

第一と知へし　○仕掛道具ハ其なる箱
を挽車を仕付て此箱の中へ人を込て仕
掛あり手文一等　精きハ大は箱の外面
をも牛皮生野猪皮にて張堅めて其又大
楯に車を仕付て十四五六人一齊に押掛
けりそれも楯にて押掛あり其作来る仕
掛あり又和蘭陀流に彼楯けり　生牛の皮
出て其楯は如くにして　仕掛る時ハ腰を傷
にさるを首は上にて被り　前より尾迄を袋なり
数百人連續して手を互に組て一様へ仕掛
る車けり　此等の器械精工其の上制作得る

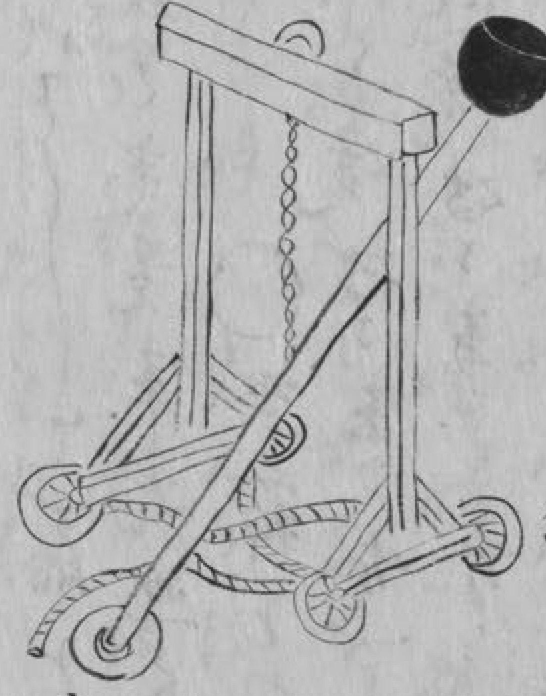
図一　○塀つを破るにハ廻り三四尺長サ弐
丈斗大材の頭を鉄にて張かこひ大材へ
車二ヶ所仕付大材の右左に数所縄を付
五十人ほと此木を牽塀門へ押向て一刀
に突かけて打破る也此木を牽武士ハ
人毎に持楯を持て矢石を防ぎ候様仕候へ
し扨門を破るに於てハ材と楯を打捨二
手三手に切込也　是ハ大切とす事也之



○又和蘭陀流に塀つの際或ハ石垣の角の所
へ台居所を仕立此台居へ大材を釣て大材
の錯地に引手に車を仕付て是を触し撞
を揉し仕掛の下にして扉を打砕く又
ハ石垣の角石を突出事也此類の制
作猶工夫有へし　○柴薪を門の扉に積
置火を付塀つを焼破る事有へし　又棒火
矢数火矢にて焼破る事も有り　手法専一
養目焼打の所に委

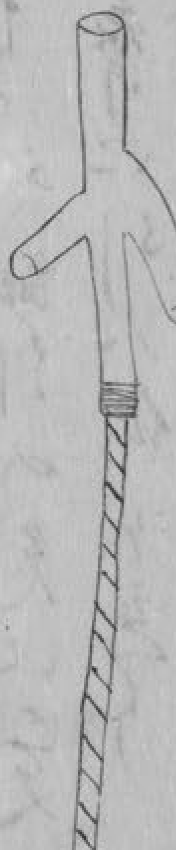
Kitasato Memorial Medical Library

鳥居撞之圖



○塀を責るハ先塀を埋ル　埋草ハ在家を毀て又ハ柴萱　芝疊　席抔類を用ゆ　又土俵をおびたゞしく拵へ数万人に一俵宛持次第に手近く埋なり　要害埋草抔手近積ハ乱敵に手近事なれハ一所に纒てちか近寄へし

○塀を破るハ切破るなり　熊手薙刀を引掛て引倒すなり　又槌にて打破るなり　又鋸にて時ハ柱を三四本太際より挽切て引て折るすれハ倒るゝなり　又細引の先に三丈四丈の木枝付て一齊に引ハ倒るゝなり

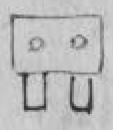


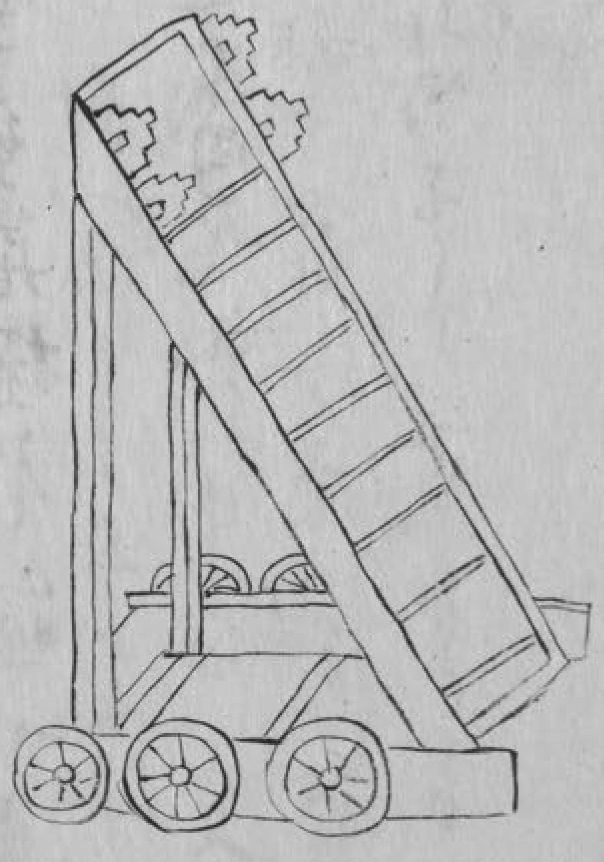
○塀を乗るには梯子にて乗るなり手をかけて
乗るなり行矢橋と云れて乗るなり此外楯に
横木を打付て梯子の代に用るなり又一曲此
杖木に釼を付塀へ倒し掛て乗るなり名
抜になり大佛貞直子破剣此塀を責敵時
二十余丈此梯子を作りて寄り塀へ打かけ
たる事も有り考へ有し ケレイキスフツクニ字
攻道具甚精詳なり見合て創作なすへし

○石垣を崩すには仕寄道具にて崩す手摺子
又は大小鶴嘴にて崩へし角石を一ツ二ツ
掘抜は余は崩出るもの也清正是術を得
たり又上に出て居る橋にて崩すへし

行天橋之略図左に記

Kitasato Memorial Medical Library

○櫓塀なとを崩すには化粧柵と云ものを出すなり
塀へ入車ある手杉如斯なる木を数多掛く
塀へ入には阻る隔て此なかには所近塀近く取
穴其内に薪萱其類を入て火を掛れは化
粧柵焼折て穴崩る也櫓も塀も打倒
すと云○火責は大風の時風上より立家々
へ火を懸て其火氣にて塀を焼なり若又
家なき時は竹木を山と積上て火を放す
○水攻と云に二つあり一には水なき山城なとにて
は城中より水を引て用来あり其水源
を断切城中に一滴も水なき様にして



Kitasato Memorial Medical Library

攻る時ハ沾濡に苦く茂堀に及一只水切趣
堀地をハ畢ミ方々より長堤を築て高ミ方より
水注掛れハ堀地水に浸して落堀も来たり
太閤此術を施されたり但堤と堀とハ高低は
千術を以て能斗るへし其堤他して切るへき
水を漂よ堀をは浸す時ハ労して
のミなす千古也貴を知へし
たしかし貴具攻城器材も有へし時に
臨く制作すへし攻具也制作も剳観して
設られたる器也独く不絶たっし変軍ハ
知ましたらぬに堀責心得て大事も有也

記ス。

○堀責ハ鉄炮を連放具大鼓を鳴し一
齊に攻懸る時を見て又鉄炮の攻口へ人数
を向て不斗合又ハ夢を入て堀中を騒
動させ又火矢筒なとを打懸て櫓を焼させ
しハ新手を入替豆板ともなや肉時
ハ堀中大に疲れものへ手さ造合を能見
定て其趣にして手配とる責時ハ利有
るへし 於城攻とちハ人数を数百手に分
て設定をなして備へし

○城中より和睦降参なとを乞ときハ能

去傍を去し本情を明にしてテ
答を出し 云板殿し後従の来近日
数を受て送に判年入此中断させてて是
かう付の各年有り能く察すし ◯ 款
将様を出て討ようと降参すると有す
去此降を殺すハ前ノ傍此降を助ても又ふ
明なり 却も云如く降人の甲冑又ハ附殿
なとを能考く云探ふへ 早く明なり
云 ◯ 城中の大将ふ腹切て残る人数城
気を応ても有 城を攻て城を追
も有り 早く又能考へて難然有

中にふ斗ふ十 ◯ 危きは前は此城を
枕として討死とも又は危き款も有り
勿こそ寔て出る款も有
も有り 後後を待款
云探ふへし 能款此様義を本情と出す
人を撰て軍兵乱妨ふ割法を厳く禁之
て安堵おもしろ 文ハ時宜に因て
城中此人をハ悉く出して味方此列に
入城へハ別に武功此志に人数を添入置
事も有 ◯ 降を請ても偽地を
立上けて金斗卯も有 又ハ半

又ハ本領安堵抔約束ニ時宜に寄一下
大に権威を振ひ近国を震動すること
大将抔ハ新領を先とし家来を忘れ小
将の者ハ恩賞に慾を忘れて必死に忠勤
者も不残よみ之抔も時に悲場に催名を悪
く座ませかさんとす事時ハ日数も無ヘ人数
も損するなる故軍兵ハ平限なく
仕伏たらへハ自余ゝなるハ命を不
及許領とも近世如何下の安
堵ニ居出大将に不得と許しおき札を
棄く寛仁の後世ゝと不来大国の九品是

右ニ此心持あり
六塚責の文字之持古頭を乞見ゝ
居

Kitasato Memorial Medical Library

海國兵談第十二

籠城并守具

○籠城ハ先大将たるもの覚悟を極ル
元来籠城法と云ハ大敵我国へ押
来るとも味方小勢にして対揚不成故無
拠所を人数の代りに用ひ引籠居て敵を
拒ぐ事也又大敵なりとも良将にして軍
を仕掛して籠城に及ざる事もあるなり
惣籠城ハ善悪て城を捨られざるを宗とす
る事なれども兆ことに泥むときハ必ず

猜右力に乗て行へく攻落さるゝ事もあり
此時に兵を引もの、籠城ハ籠城より夜
討を仕懸又ハ敵の油断を見切て不意に突懸
或ハ根気を挑して其まゝ気を疑ハ必勝
する事有ハ城中仕掛け太刀を集て敵を支
右力になすへき術なり是良将の籠城なり
○籠城に大将の覚悟を定めは必死の覚悟を
極る事也初に云とく大敵に囲まるゝ又ハ寄せ
軍を仕損し精力つきて籠城に及事
なれハ運開く事ハ覚悟なき事なれハ
能必死の覚悟を定て能々攻城の術を呑込

てもに此の不屈能将機窺見し勝を計時
ハ寄手を追崩して運の開く事もあり
此大将必死の覚悟なくハ籠城の論もなき事
なり要を捨て降参を請へし　○籠城の
時寄手の乗の虚しに法を必死を覚悟定め無
守者ハ安全を以て落すへし　名越手法有
くして妄に仁に似たる事を行ハ其虚に
乗して敵勇の士も臆病心を生し皆落支
度に成る事も有之故に必死を極め兼る
切要にして法度にて人気を引立る事なり
此等ハ大将の法と不法とを明らかにて

Kitasato Memorial Medical Library

右事之故事常に軍士又ハ陣中の志心
死を極め萬事を与へ共人組ミ共輝をと云
上して落付くし　但自ら序めて根を合
し勤る事なれ是云を与へ或ハ運を開ハ
陣多中よりなき言合めとたれハ千人出るも
敵ハ侭れ危場中ハ備をなす事なさるを
と云へり○籠城ハ人和第一人此外利名
人の和と云ヘリ　結構要害　籠城籠るとも
上下和の事なきハ役を生ぜぬもの作る
ることなき事之ハ家和之ハ緩み中しき人と
縁に踏すなりとを踏し　其家の事　尚ハ

なるもの上を怨みて或ハ與へ陣しさを與へ
賞すましきを賞す類なりれども怨めは
諸士姑て心生て何事も精入る事なき守
倒も就るそれに成て節に破れて内乱を生
するなり此様に諸稽の如き守備に籠るとも
人和を失ふ大将ハ急端落すしと為る一し
総為に籠城第一の道具たてハ人和なり
古代名将達の云要れし人救人和と云は
心将遠有充和といふハ上は人柄和らけは
なく其和よして自罵の声なく此に小恵
を行ひ彼に媚を加ふ文下なるもの任の謂

Kitasato Memorial Medical Library

もなく上を親ミ倣ひ手足同事同意も
異ニなく勝ミ此ミ和と心待人和策事ハ和
なれ共其花漂田の和ハ天地無帰なり ○
籠城すに勢際の一戦以て一し今退意
ハ体貴の養に至るこし却てその利を失
ひ終に押詰られて籠城に及事なく是
非次第在念無極なれ共ゟ対應す事と
ふ実又面とを営く探て陣条と仕此るき退意
なれハ一二此ふ論引籠事なれ共未練と
敵此ふ囲以おに違方に踏散く敵を掛ふす
兎角ふ掛ふ武運傾て引籠る事

なれハ其形に危弱此一戦と定て手立とて
一軍すゞ事之故ふ萬事ゟ図ハ打出す
萬々城所を見切ていまく後勢の息到セ
さる所を討へし次に夜討すへし故
討に四の図なり夫軍此条に詳之故此一戦
に百見すゞ人数ハ中ゝ多数此なと探て
短兵無に如在無勢賤兵ハ臨時の只合攻勢之
○寄将此留守ハ人数も不足勢ふものなれハ
変動此事なくても十に八九ハ防戦此必死策
在し患然時宜に因て兎早ミ人数を
出して打掛る事も有之留守城代の

Kitasato Memorial Medical Library

戦界に宜し
○日本諸流施竈塩多ハ煙り根高家又
ハ在村の人民の穀帛塩味并薪に至る迄
杵木籾耕の具を以悉く竈中へ納入て
運を用ハ一倍にして返すへし 約
を定めてかくのことく施本ハ己らず民心を
離さず仕すれハ必竈施本なれハ窮なる本
ハ返らず貧乏の事 日本中にてハ蓄積の
設にてもしかれハ此後の本をなして根本
帛塩味を蓄る外御座なく故に設施の
竈場ハ穀并金て日本の気竈場となる也

の事をも下庭する事竈塩并一施を分
成へし又成近江國施穀を蓄り厳山に
穀物を積む事も此心得之故に施澤なれハ急に
臨て七轉八倒して運ひ入り積み施も
職をも速に行へ金ハ竈場に塩を騎動
する事なく手数も煩もなく済へし并又
塩施肝要の心得なるへし ○上に云ごとく
竈下なとにも近江國の穀帛を運ぶ事
なれとも此竈塩々儀懂に施竈場にハ
運入へき米穀もなるへし然とも大窮
施時節に兼て蓄積有へき事く并穀を

Kitasato Memorial Medical Library

貯ふ穴ハ掘りて貯ふ一トし粟ハ數十年
を經ても虫ふ喰ハるゝことなし仍に生
に箱食へ入置て若とす勿論緑に適し
篭するへ人数を兼ぬ事ニ至て糧米を貯
へし船ハ千人篭らへるに見積りハ凡人
一年の食ハ現米五千俵粟ミて一万俵之
なし積ミて其ハ三年分中ハ二年分ハ一年
分然貯ふるへし齊然田単ハ二年分城
を籠ニ在へ雲然の孟子ハ六年分篭城
を支へたり是人和と粮米との二ツを以て
為故之貴ふへしと云へし粮米の事ハ和漢

其説多けれハ新に説にも及ばす事なれ
とも初学の為大略を云之先粟然米ハ
知に云ふし其外稗麦及ひ黍又稷大
小豆皆貯ふへし又糒を貯とす糒ハ百
年を經ても朽損する事なし小子安永
年中に万治年中の制の糒を識れり
只其性かろく第然と覚て其味なし
此外乾肉魚乾菜木然実迄貯ふへし
○塩ハ大瓶に入て貯ハ一塊に第然百
年を經ても保ものなりと万治の塩を識れり
○味噌ハ塩を深くして壇中にハ粟を

浜挿を多植へし 栗ハ勝要に作り
浜挿と稀とハ収納の二百分一年と作へ
へし 或百分此二ハ万石より五十石を
作る事なれハ心あるゝの有之但是程此
作も流れぬ程此ふ経済ならハ兵倍年も
なし あき事之埴とを押しこて置し
正史と変ずるをよぶ○篭城に外々味
方より兵粮を送来く様に人足を深
中へ入れしむる事なれ味方此刻外軍
を見合て俵此中を故く後埴中へ入
し 沖断する事なれ正成甲冑兵

器と俵ゝして敵方此去の去ゝ似しこ
湯浅此埴中へ運入隣して後に俵の
中より兵具を取出し武具以れ埴中
を切立く千職を蔵る事と云ハ往ん
を乎へし 夜又兵粮入る時群人を石
敵方敵の千犯子なるハ早く門外へ
人を出し 俵此中を故め具の兵粮の
ミハ早く引入へし 然るも千人に此以
す面々千種力なとも捨来るハ千種アを
棄ぬへし 千外なる乎組揃しなへし
○上に云ゝく粮米と多く日和よし

Kitasato Memorial Medical Library

御も巧にして数筆塚をかとされさるハ吉
第一筆ハ若されも唯打て九一打ハ上に
執りて筆を遠構を吉の吉と云
なり然とも極地所あり鋭敵とふ
構とも二三筆も塚を打掛る事中し
凡打よふ執所之篭塚の将師能く思ふ
事へし○塚へを開く討て出へし負（コモウ）
時ハ先ん主絶を発し又ハ右旅を落し賊
ろ敵の四方塀に向と入海して脱る
のよく寒て出し　但騎兵ハ地乱
地宜よ有り○篭塚ある一曲輪切

に討死と思ひ定へし　云此九より二の九本丸
と城中に打ちのに非ず必籠城の更一の覚悟
也○境目地塚を設て囲内ハ本塚より
附りと撥まけ法陣を避事なれハ持係り
事に境目塚出て覚悟あり下し○篭
塚を設て敵を眠すハ廣く夜討をするに
志くハ方し　但引篭返して此大小
足く逐陣を出し　密へし○塀裏人
寂死ハ塀裏に役所を撫るし頭ら此寂馬
云ふと西に役所の案人立寄ある人数組
ハ上にて遅わし　路嶮に定め寄て営中令有

Kitasato Memorial Medical Library

此相下も省く事なれ共人数ハ帳一冊に
三人宛配るへし 諸卒なき人数組ならハ
五伍二十五人に帳裏八冊百人組一組に三
十五冊出すへし 又倍卒ある人数組
ならハ一伍五人を一組として陪卒の数
を計りて帳一冊に三人別にて帳裏
を記すへし 多端人数者余りならハ一
冊に四五人宛配るへし 但帳裏に
姓名をかけく組頭某と書付
諸卒ならハ諸卒姓数の面々姓名を書
附へし ○大概しく帳裏人数配之
出て少しも差錯なく其持場を
立る事なれハいかにもまきれなきにあるもの八難なし
○士卒十人に一人 此役を除て都合十一人
其を一組 此遊軍として一手に二三組
入る十組二十組を設けて新帳裏を見
出さ為をくく書付ケ所へ其人数の頭
立て諸へし 此法は便利の人数之
○卒は諸の責を為に倍卒なきの組ハ二
十五人より三人宛立へし 倍卒ある組
ハ一伍五人数よりハ三人宛立すへし
但諸卒姓名立墓目付本卒あるれ五人

の主人牝内十人宛代りて小勤務も口前之
仕義中返事の中より物托夜盖を出
す事し　然ろ此打見至る処ハ表大切條
役之急事なられ○諸責方織時も塀裏
の人数中合く其兜甲冑にすへし　急
成ハ罪す○夜ぶりにハ足怪をの用本ろ
れとも独一人務常れたるヶ又軍士不足なる時ハ
右往町人共の義に候も故老年相応のを用る
へし　是ハ三人を一組として十組を大組
と役て東の組西五組ならく定勤足来門
もきらす塀裏をとるへき一曲輪切に役者

へし　右此人数ハ塀裏の其の軍士と　出横に
新て其に御急を成へし　○右所町人の
ハ其を擇て頭一人添て其を大將役の用
ろへし一丸に二三組も役ぐ事し　右條中
火急成を打鉦ても塀裡托東軍士ハ云にハ不
及托軍勢も少しも火托方へ物ろ本
あるれ依托塀を会人く事へし　右條中
公に不及塀外たりとも矢炎焼す何れハ
云事とも無人数能て甲冑すへし
○篝儀の趣意ハ又人数の手当十分にて
大概本意なり　守とり　不守法者異

Kitasato Memorial Medical Library

と記シ之れを工夫すへし
○塀狭間ハ桟上ハ貫一枚を渡して矢
炮を發し　石を打出す也此代にすへし
石打の役ハ百姓町人又ハ諸牢人抔に申付
ても用へし　○塀中ハ小路にしにハ石落
を拵へ置言ふ其上ハ通路を禁する也と塀
く用心なり　○塀袖ハ一間に三人の積にて
れハ其通路奥も三足にて出すへし　但し新参之
無之所にて番をつけ外の番人をつけ置へし
塀脇一間にも鉄炮三挺弓二張又ハ挟箱
すへき也役人有之れハ能〻計へ之すへし

○塀裏ハ武士地なる所も有之　足軽地なる所
も有り又百姓町人地なる所も有之　諸事一人
数の多少寡ハ塀の大小と大将の方略にある
へし

篭城に用意すへき品

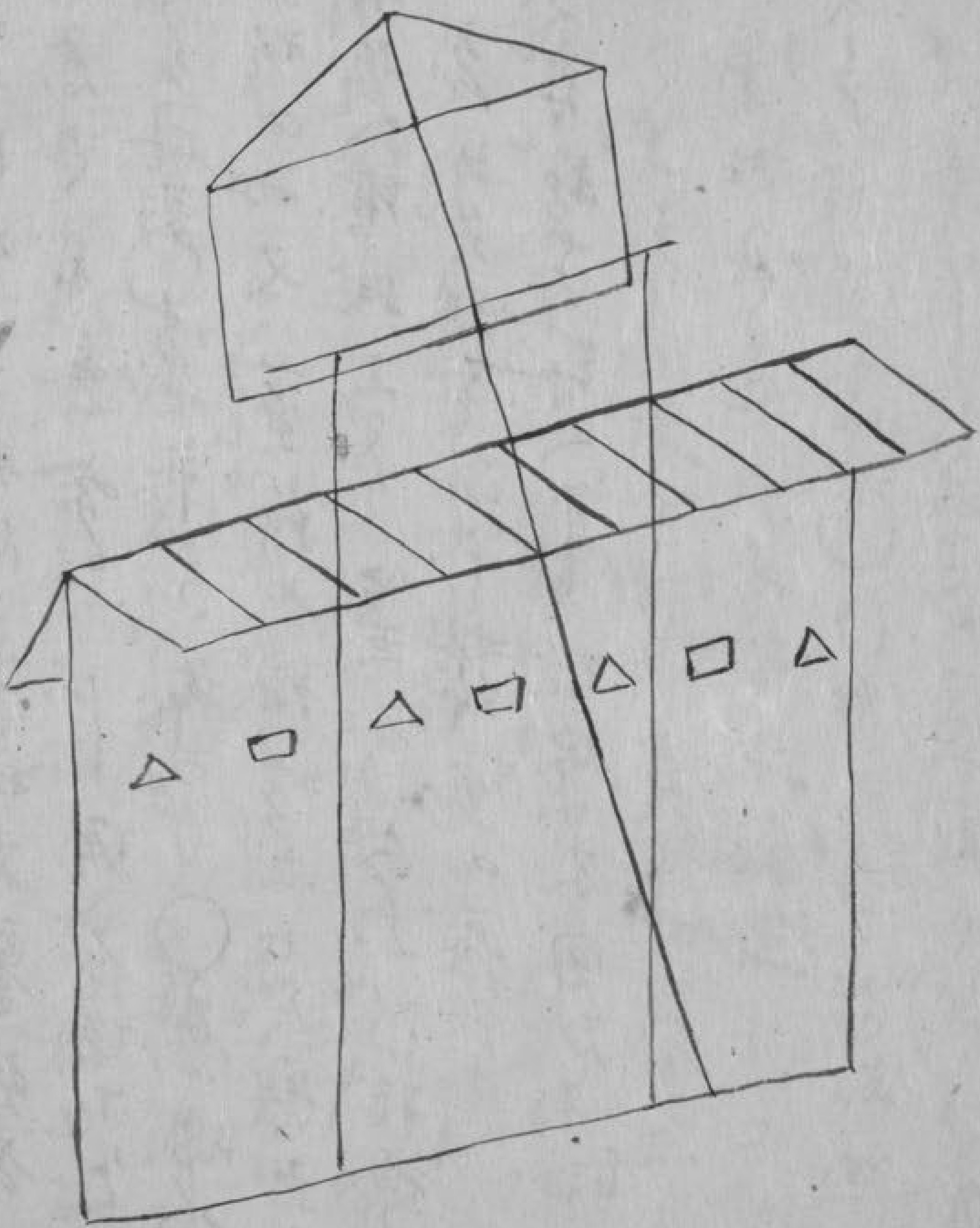
塀裏に六七百目より四五貫目迄の石多く
積置へし　大石ハ落置にて弟ると云と
小石ハ石をしてすてに投れ敵を防ぐ
○塀裏へ砂石の類を多く積置て　丸く
主へ砂をも打擲へし　○織けて溜置べし
く飲へ置へし　○乾せし灰を水和して

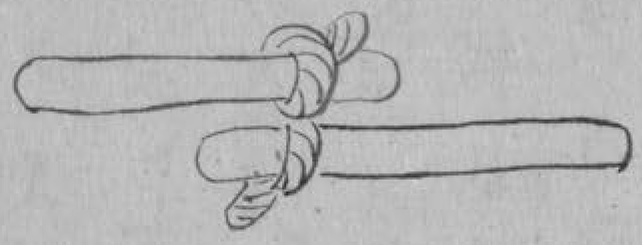
Kitasato Memorial Medical Library

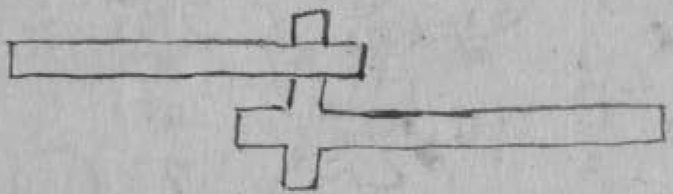
用意すへし近来ハ焼る鉄ハ日泉
へ入て難義す之○門樋井戸流役所收
余磨鉄近きてハ水溜水漕水桶ホ又ハ
溜池を設て水を行ハ寄るへし火先ホ用心之
○韻味水水溜鉄類用心すへし京古椀を
多く行置へし水を汲て投へ投かけ
に代紙巻拂ひり一吹豆炭とも之○葦を
長竿の先に結付て火を消道具に用也
置へし○塀裏にハ打目しく高に大材木
三十本小材木百本大板三四十枚小板二三
百枚竹ハ千本古俵二百縄手筋大釘万本

鍬五十挺鋤五十鋸鉄五十挺究鑿鎚斧大
槌ホ悉く用意あるへし塀又ハ植木ホを破
れ時速に割請に用ゆる者あり○屋錦の蒲
団の類の物又ハ菓藁の類横六七尺長五尺
余にして楯ハ塀紙上より四五人向ふへ括棒木
を立て足出矢炮を防て則ハ塀の上より乗出し
く敵を討へし括棒木図在て記

Kitasato Memorial Medical Library







○石を穿く具あり第一巻水戦之條にて図を出す又山攻條ハ大石を投す事あり又和蘭陀流に〆手自石を擲事あり又クルリを以て塀石垣へ掛入て打崩る事あり　其図爰ニ出す

右守具の大隊あり 從武備志珍録ケレイキ

フッタホス令新制あり
○篭城の時城下近辺の民家を悉く
焼拂又攻具に成へきものを城中へ入井
此内ヘ裸物毒物を投入て支手に奉
公する人民は国にて請取役と云
○又是ハ已に縁と云て城外六七里其他遠近
の所に陣屋を構て篭城の時城外の人
民の保所とする事あり面白き法なれとも
日本の気象にてハ行かたき事なるへし尤へ
詳にハ記さす然ともいつれも志ある人衛に新
施すへき失政と云ハ非なる者○国中に

Kitasato Memorial Medical Library

且又此倉廩又ハ大社大寺なとの掛り
手ニ心を用て普請を加へ置て年時あ
時ハ出張の要害ニなすへし
其外此身より籠城の為の大概を考
あり於和漢此名将の籠城の方略を
見出して工夫を付へし 扨又此
上ニ大事此心得有て籠城ニ及ハ
又ハ度々年を仕損すれハ将士ともに
人気類應して不伸してて人気不伸
とき八年ならに不及普請を例あり追々
数々度仕損して終にハ将あるもの断を

能各しく 自段ハ云ふに不及士卒諸軍
に至るまて力を不落様に大将ハ率兵
士を従る人の職情器量第一の事 漢
高祖ハ項羽と七十五度戦ひ毎に
七十四度負て七十五度目に項羽を滅
ほし 又七十余度の負ハ八ケ年の間也
しかも人気を落さる事なし 終に
天下統一の大業を為終て大義
経ハ設落して其時ハ下一統ニ従共
其気ほして力も脱落し ならに取難き
此之時ハ程を察して人を為として 又ハ

若軍勢の口備を仕知して人気を引
たてあしく先の中をあんあく奥
あるを以て即ちたり又雑魔の銘鉄た
けきて大切の事をよく呑込たる有斯
相云相行をあしたなり　一通の書
信とゆきて守する者なれ有る

海國兵談第十三

操練

○操練とハ軍を出す時ハ言に不及平生時
まも人馬に軍の仕形を教習する事也異
くハ國にても同事を云唐に教練と云唱に
操練と云皆日本の日本の軍の古ハ教習と云を
畜て國としては軍國を畜軍事を教習?
先に先也平外太追有年追れ又ハ蔵
道椅と云事とも操練教練ハ修得ある孔子
も以不教民戦謂棄之と宣ふ有るに

Kitasato Memorial Medical Library

日本にて操練せる事絶えて無し 其
技は弓馬槍の小武芸なり 稽古也
されば手一芸ならではなし。されば
況んや天下の大武芸を稽古するに
に備へ事は必す吟味あるべし 大将たる
人能く知る所なり 異国にては未世に至
ても能く操練を決して又其上に沈揺は太
閤朝鮮征伐は明は万暦年中にて
其国百余年不平穏なる時なれども
明を朝鮮へ加勢に来りし 軍勢
其事備へ止弦なりし其自在にして一戦を

使ふべし 日本の諸将大いに驚きたり 又近
世明和の唐山の福州へ漂流して二年にし
て日本へ帰りたる者の物語を聞しに南京省
其辺迄は軍の稽古を屢見たりと
云ふ今の清と康熙以来百余年の静謐
にて其上南京省は京師を去る事四十日路辺
鄙なれども尚かく軍事を不棄事を学
ぶ故に如斯事甚だし 扨日本の軍
は操練もなく軍法もなく只唯国士自
然と英気に任せて手柄先駆をしのあり
唐の兵接戦七八一なんの勝利を得ることも

久敷戦士法語にいへ八年法蔵寺の策略
必危解して持つへし兵を用ゆるの地
所を能く会得して操練の仕方を考に大略
を記す当要く考へ教ゆへし 但御書
にある陳大絵図を持ち教ゆへし 練操を計
は先操練すへき場所を設くへし 大概其
其八方六七里 六丁一里 小勢は四五町十町斗も宜
敷し 図は大小人数の多寡に随ふへし
是を大馬場ともいふ一年に一度設へし 二月八月
其余の小操練は八巻に図する大筒校の

八巻目に云ふ所の押前陣立の次第又晩陳
の張様なとを教ゆへし ○次に惣軍兵陣屋
に居る時陣触の鐘を操練すへし 其仕様
八篇板へ明六ツ 日 何ぐ刻 何方へ出陣と書
付出陳の定所を除来も知らせへし 此形
をさへ其斗竹に挟く昇はまするなり
左能昇を出大将より一札を主人衆に公
持て当所へ来る也 但当所七組有り 右札を
一般へ一札ツツ来たり 自陣使はは
有所に当所へ封印して御請 和所
なり其時当所自筆にて姓名を書て

別に使者を仕立て手下の百人頭へ遣之
手付百人頭自筆にて書手々本上の
すへし　但百人頭鉄人なる事の使ハ
旗本より帳に相添て弓箭の百人
より持場にて大将の使者へ渡へし
又持の使者の持場にて再に大将軍
へ納へし　取者頭ハ大将の札を写し
立て手下の小組頭共を呼集て大将
札を見せて手札へ清書を書写へし
へし　小組頭共ハ又手札を写て持場にて
手下の前立五人を呼て大将の札を借無し

へし　五人の首立右札を借場にて再に
の組合四人の軍士共に見せて手札に写
此判を封て大将の札を小組頭へ帰すへし
然るに百人の軍士を云とも一々清
判を致て借に於て出さぬ家之○次に
貝の吹様之次第　一法一番貝ハ揃之
退て備の支度すへし　二番貝ハ支度
成すり兵糧すへし　三番貝ハ揃なり
出て陣所に揃て大将の出るを待へし　取
貝を待て其の吹様にて手法繁多なれとも
残情の軽き事にて細微　相図ハ少からず

Kitasato Memorial Medical Library

如く都て軍遠近の法と陣事をも知るへし
故に吹ける事貝を斗定むへし　但
息長き乙急りに吹ける事ハおおく
但し出陣に見ゆる所は明細と一字に
禁して寒に出陣する事も許す也
触も又鍛錬すへし
○次に太鼓は行法数へし　其法鼓ヲ
四五町より二三十歩に法る近ハすく打
なり大概太鼓一声に一歩ずつ法成
へし　扱鼓は二三十歩に法て双目睨合
て或ハ法り　兼而ありまくなし　其時ハ居座

ちに淡施と連発太鼓をハ三拍子頭打と打
く早き太鼓ともには士卒吾二吾三に至烟
成りより鼓隊へ飛込く軍法燒巻するか
てらく頭手の太鼓を吹ても不進者ハ其頭系
鍛軍法見ざるく立よして後斬くすへ
し　○次に押行振と云ふ数備押前ハ人数
の多寡ある地燒易に因て次第不同あるも
地なれハ一概ハ云ふかへし　隊行列を不乱
ると大小便を使ふ　草鞋ホをも気を付
の荒増を教ゆへし　○次に押行道中
まて鼓に失あるし　ある時抗備を散す

Kitasato Memorial Medical Library

然る押行一路に前後左右共物見を用
ゆへし　故に兼て共すに欲かりと物見より後
をかへハ鐘太鼓をも金を鳴らし押行人数を
必すまりて時ハ人数を遊はして螺吹共
下知を待へし　鋭共方へと法度へ篇あるにハ
前に記するごとく鐘を用ゆや二十仕所ハ第七巻
目に委所の段を教へし　西岳変て鐘太鼓
の下知と行て鉄に記されと　鉄砲立二
矢三に定めあってハ鐘太鼓共ト下知を待に及はす
皆なる侍に互に合て合戦すへし
太鼓軍後を流る横を入けるすへし　地

共侍ハ猥に動揺せす各方面に向て岳変
岳て鐘太鼓の下知を待へし　下知なきに何も
動事なかれ○次に押行遊中に右より
鉄共見付て敵を教へし　三方四方より
目前なり○次に押行人数を金を鳴らし
押止る事を教へし　其法先鐘太鼓の鳴
を止て金を鳴す時ハ先陣ハ引退後陣ハ
押通して難所に及ふなり　然る所に人数
を押止んとするに押行なから金を五声つつ
へし　其時従手も金を鳴て返すなり
鐘太鼓の法ハ一声吹に一声打へし　両三声

Kitasato Memorial Medical Library

目に譲刃の足を出す　手引も中分取實
是を出す時ハ先陣行より来ル　後陣押鎚
来るくして行列備あり○次に敵味
方備を押出して大将会戦も教ゆ
へし　是次第掛りに左あり悉陸戦の
巻に出たり　鉄砲中大切の撰陳なり○
次に敵を踏破て追行時の事をたん
れんすへし　是も陸戦にあり○次に
味方敵に追立られ乱時の二枚見より様を
入替と般練すへし　右切刻○次に馬入
の術を操練すへし　馬入口之法者右切刻

○説あり　馬入をすゝを喰止之を右切刻
○次に長柄備を右切刻に配しあり
○次に大流の打払又大流を敵戦に用る
術を教へし　二ヶ条門巻にあり○次に
諸貴の法を教へし　鉄砲中　仕寄の事
仕寄ることの要変ハ城責の巻にあり
鉄砲中　兵器ある仕寄る事を能教ゆへし
○次に火術の法を教へし　是も篝
城の巻にあり　城責篝火の二鐘ハ其事
多事あれハ能々と施く教ゆへし
○馬を教る事ハ十五巻目馬性并に詳之

Kitasato Memorial Medical Library

なく小椅子座敷抔仕様なき習俗有教
へし　尚此外に年中礼式なる周旋
の時教ゆへし　扨又筆抔　功拙ハ此操練にて
足息にすへき事　扨又日本の年ハ操練な
き故唯抔年壹々齊くなるに依て
かる事作り　此外和漢抔年立の精粗
抔相考年紀を見て知へし　皆操練す
るせさるにあり　孔子以不教民戦是棄
之と定メし事能味ふへし　猶此人を
年の世抔人に甲冑着て奔走なる
時ハ顔を引　肌筋骨痛く一里も
行来知らさる故に操練の為毎に甲
冑きて奔走せし　去る時ハ度量れ
自然と甲冑に馴る故肩も引れす
脈節も不痛　少しも喘息も不切
後ハ二三日晩すとも　されハ身躰も不
疲となる之　此不太平の操練之効は心を
用て教ゆへし　然に当時太平の化を乱
家世に存く古法抔云を申す事実に多
罪なり　然とも人も知とり能く云へし
なく　日本ハ海國にて五カも隣國多
き地勢なれハ唯外国の為の為に　如

Kitasato Memorial Medical Library

此故ニ今ノ事ハ家中の武者ヘ下
当世武備と云事ハ各々に絶ル事
なれハ皆座説ニして実用なし
危キ哉武備と云事をなさすに
かくれしと云ふ事

海國兵談第十四

武士之本体并知行割人数積并剣度治令大畧

○武士の本体ハ当世ハ百姓と異なる事なし
ありて扨如何と云に古の武士ハ皆土着
にして手作にて耕作多く不務したる
物ハ譜代の家の子郎等を扶持し
軍陣に出るにも良等ハ云に及ハす
軍兵を仕立百連たる也五百貫千
貫の領主ならば五百人も千人も出し
たる事也信濃木曽上野新田伯耆の

名和肥後の米山皆古兵の大身士にて急
に臨て軍兵を出し於て不案人て知
所之叔父小深の武士年自農作して
作ると云に若干故に三十石程地を不耕
て馬なとも何武具馬具なとも連て心懸え
事なく只極に嗜なく素之農作する故
手足ほらしく文史之席猶漁猟なと業
とする者帰骨怯懦にして其方の親戚朋
友と往来するを楽に思て不殖平ハ穀食
短弱に口腹身体を馴す故軍陣へ出て
も此二に不昔文観古代の武士の有様ゟ此

成もの也然るに至来天下一統に武士ハ城下
に住居するものに成て城下に群居する故
自然と衣食飲食家作ホと美麗を侈し
終に武者の様を云失ひて今の世に士たる
嗜とゆふハ衣食住と平居振舞の飼もし者を
流成ると第一とする如此奢侈盛に成て
西々軍用の器に缺る所の俸禄衣食
住と婦人の費とに成て武用の器の縁
を忘却するのことし新用の奢侈盛
成て困窮して武備と云者ゟなる国
危して武備を云もの不事ハ急の交剣席の

不正狡猾を忽にし頭ハ剣術を以て其
後を禁し武士たる者の文ハ其品により
けしても武術其無の有事一國一郡をも
領る人第一の紀すへき事也今の世にても古き錬
侍に家中とも其品に至る迄かりとくハ者
藩を始として有馬大村肥前薩摩などの
如此なれハ道をも多く備るも多き可也
○兵士を撰ぶ事ハ其家中頭役の者
を教へハ品替りて撰士の巻にも云し武
勤れとも事へハ人数を調へて一方を任する
者のなれハ学問まても文武を備へて大

器量ある者ハ揮出しても好道第一に
為立候へし其士ハ頭となる器を兼て備
ものなれハさ様の学問も多を入用なり
只剛に富て勇壮なるを専一と為し異
也多力なり非力なり此所に所謂勇壮
とハ力量ハ云に及ハす意気の勇壮なる事を
云意気を勇壮にする事ハ大将の方寸に
ある事にして亦一つの術なり是を後
の大事と云なり
○身一つ武士をも其為にする心持第一
其兵ハすれハ其骨にしても上藤の風なり

古代質朴なる風に復すへし ○第に三
四ヶ處聖也杖郷して武士心氣をとれ
謝し心氣沈静なる言六物に用遊を
急へし ○劍及をたて衣食住の費
用を省き節倹修なる心を生せさる中に和す
○○頭役には各器量の人を用ひて組を和し
大将と士と遠く隔ては士の師を見るより
あり共と親しく其道は従士の藝能と頭
あたり中互に是を思ひ自其を試み知
推に随て更に変態有へし ○学術有
之は或は蔣策なと書せ詩歌等を作らすへし

○徳高く大義危急に出して
弓馬の力の藝を試み又は前力あるさせて
業を見て歩行を學はすへし ○
判物には外にも杖士を御とく公て出世
随て勇力早速なるを見分けて勇氣
を励すへし
士を取上下親しみを深くすへき徳
有へし大将たる人心を用ひて上下親
深くして君臣合体すへし其は所
謂百姓皆能吾君に非吾君に非
者に風俗を成し所なれは義心
Kitasato Memorial Medical Library

必図しんの勧

○紅行剤人数億姓奉之器なとなし
英雄とも是を兵識と云兵識とハ紅行を
主業として人数其勢をも積み立てまり
人数其勢まをもてハ年御の根幹を立
神たて此節をよし文一とし矢敗之其兵識
の事法とハ其家三代の時井田の法ありしも
常時主組れなくとも紅行事を考へて人
数の勢事を記し兵事をして一番一郎
なるを領す人唯附すれは其なし先年
古たと様はすでに三法あまり且赴其大昆に

邪されハ十分に難行之英成たる其に成かし
らんハ古英の其術を設へし其たる人ハ西
この紅行所に徒居をしも取務其臣ハ
十里二十里五六十里をも隔りたまたり奉ふ
自由なるなれとも西ろに家中を多く
扶持をしもる八只其に勝らそるし吾
藩及藩府此家其とあまり文此ち術を
強するに俸禄ハ紅行たりとも重禄かまも
又に取扱揃ハ藩城其在所にて主在其変
を一々行うへく徒属をしもつへし其断
あれハ二千屋敷に田圃を作り七五人七人

Kitasato Memorial Medical Library

の家中ハ養ふもの二ツハ倍算ニ多
出させて算士先ハ是文一ツに役人
家柄此外をハ悉く十石十五石の小給ニて
皆其外に出して算を給人ともに云く
出給り殿こ 吉益之学ハ身の出来いたし
信算ニ達す人数組より桐原木村杉浦
飯田 算士を多く抜擢致候良法なり
と存す 加信算ニ達す人数組を信算
達す人数組より 信者を論さ候ハヽ
事組を云すな手当ハ何程も別段
人数組たりとも 要こ 信算を存り業
時ハ何と存て正整せさる所之文信算ニ達せまし
然ハ齊一ツにして 給こ依る花数ニ付き 仕
安きよふなりと之り 此格に小給の者多く組
優れりと存す ○大抵ハ多し給人望を
十石十四五石にして其中大抵也 一般
御国の大小に従て支禄又ハ扶持米ニ而組
之なかり 手当ま 勝手次第にも給人
をハ手当所の勝手に定て手当配分
掛を認置くを要す ○出ハとく
家士と同給人に付て其組の歴々と
往年城下に役所也 而て貴一学校に

出精させて文武及ひ無油断とならすへし
其役々の頭列の諸役人まて此事を
第一の事なれハ其役ハ人をしめくゝりて其役に
附ける人ハ組ハ組頭をもつて組下の諸
事を申渡さしむへし ○左郷給人
ハ両三の支配頭を能見覚候に御馬下
知を能心得へし ○古ハ大縁をとる事
ハ手縁に成て 譜代の家臣子共を
扶持して年頃と勤させ何時も為より
然るに当世は主も武士嫌ひ奉公構を勤
ふ時ハ上に云ことく俸禄は衣服食味の新覚

と取て家臣子共等を扶持する事ハ亦稀
様無之事中君を取把て年頃の功もなく
を指なりと無き人をも召に抱れるも 一季
二季揃ふしたに先金を取得に至るハ十に
二三勤るハ 時ハ二三百石より 扶持立
たる者の事なるも 一季二季抱漕居
をも仕ふ人々大切扶持に致らは不承知
不出ハ無是非て頼に至る人 一人とて勤へし
恐多くも以来これハ古に大縁をとる事ハ無るへし
事扶持 一反ハ三十石より扶持ことを主職
少ー領 扶そ 二三十石 家に奉る時ハ去所

Kitasato Memorial Medical Library

此俸禄皆年限の内に立升し　千石以上は三
百石取れ士まて欠落せさる家人十人召連と
と云とも今風城下詰なれは交るに相
成事なとひ物数寄勤なと而人
随まゝならぬもこまんとも僅二三人之又一人
の俸禄を三十石宛にする時は十人にて三百
石なりと云る石の知行を出す代に随ふ
年士十人用ゆると云ても以前は士に三百
石の此禄を皆減かしけれとも並て三十石宛
にする時ハ年士十人用ゆされは士に三千石
以上の此禄を其外ハ明様に節倹すれは郷と云とも

物代其之其ゆへ其此禄を其に減少する事
其一人情にかなふ暮慾の名を当なし
其ことに仕舞もなく不ハ扶持米ならは二三十俵
まて減するなれハ知行割俸禄割扶持米の外
の節勤なり且此騒動の三方斗人情恐ろし
して是なれは天下恐ろしき事疑なし故
又此大変騒動を忘れく千石以下
ハ皆の俸禄悉く諸士の新募に勤て一万
人扶持すくす知行も俸禄七万人なりてハ
扶持せられねなり情なきの事一なり如何
てか俸禄も不当ハ年士を定之七千騒動ある

Kitasato Memorial Medical Library

不生の御為之窮に至ハ制度を正盛
今を崩すまし　倹約を専とし　奢侈を
抑えの花美を打出し　淳朴の風となし
人々業を励み利を勤め事を省て結構を
富しむへし　設令富饒の時散財諭して
通く派に至して家の子良等を扶持す
可例を崩さずに会合すへし　千倉会
而して自に迎る剋今の心には家の子良等
を扶持する時ハ一万人扶持すへき剋今の為に
して兵粮遠一万人扶持せらるゝ此所を能々
考へて古今の制度を考合せ積考すへし

工夫を知る時ハ当世奢華にして　兵糧動世
中とも古代に淳朴の風に移して　手に当る
世の名字をかさね　諸士に治倒して実義をまして
武義学問を専とすへし　再新令を含制度
八倹約を不費く終始を守りて　年々を不
足とす　武備堅固にすへし　昨年まで為に
斗る時ハ変生すへし　三十年を期として
改革すへし　其上改を能する法あり
無之也　而して其文中に之を定む人は
未だ不良等の扶持を仕付　工業為れハ平仕
前の大患ハを不口迎て考を備あるへし　是世法

支那風俗ハ妻を持ハ唯婦の如くにして
二男三男ハ皆他家へ養子と成故父母の家
にて其二男三男共をハ他家を継せしめ己ハ別
に奴婢を召抱く彼ともとするに是故に骨肉
の親ミハ日を追て疎く人と親むの勢へ先哲
よりの行為等ニもして親あり　古代の
風俗ハ二男三男共皆父母の家ニ居て
奴婢の如くして家業を助く御子も長すれハ
妻を持て父母嫁子を助く家業を営ミ
元父母の家にハ別に奴婢を召抱る事なく
て人足も是くハ篤家にして奴婢も
召使を多くハ夫婦ものにして古遠ても少し
男一家の内に多く是長少有と共て盛
長するを親ミ日に厚く古の淳風に帰るも
ても互に危を救ひ捨一処に集て近
するなるに倫を基信しして其其近日の
の情も薄を不侍不足にて家の子孫を
二三十人以上扶持するハ一度厨子にて難
れ国ニ困窮を與之ともニ知りを云ふて
扶持する之他国ハ不知其落の強風其知り
とふニハ患く候りなりして笑ハ之
成事より一生経まて是情也と大略武

三石より二三十石迄ハ其分也　三百石又ハ
士之内多くハ譜代の家中を十人も二三十人
も持之況大禄なるも者等の其外から新参
を以て常に一方の知行を持つ人ハ其事
以家中人有れハ六百七八人ハ心易く扶持せしむ
る之
一万石の其分ハ五千石之一人当二石五斗の地を
給するに有れハ五千石なるは又人扶持也なり
相身共可武具兵器等ハ言ふもさらなり又在
家人も馬も何事も田舎に住して雑草
まて何も取初め事として此節に
言ふし共心懸強勇にて百石の勇士で験
馬に三十疋五十疋出さるなり此積りを以て推
時ハ四五十石之士も家来を一両人扶持するに至る
其余も其分に行われハ御目見以上
百姓のよく嫁に様子して業修を営
にする時ハ一年の物成半年分にて足る之
家来子共を扶持するに事ハ士も又新米
と為り田舎士共武備毎無ともと
士分武将ハ家中の士馬知行として事
を此て永代平地を領してりの家来子
を又大名にとせて人数を多する所の施し
其御風と無すへき事武威の根本なり
人数積知行割の大異在に能後並外
Kitasato Memorial Medical Library

敵有之 ○三貫文以下草騎にて当
然者但家族子を扶持し又ハ戦場へ召
連る事脇手次第たるへし ○馬ハ自国
にて八五貫文以上自分馬他国へ備ニハ近隣
八十貫文已上自分馬遠国ニハ二十貫文以上自
分馬たるへし 其余ハ悉く借馬たるへし ○
四貫文者士家族子一両人を扶持すへし
並五貫文者士六馬ともつへし ○六貫文
二人馬上二騎 ○九貫文者五四人馬上一騎 ○
十五貫文十人馬上壱騎 一人ニ付二百五十文 七人ニ付弐人ツヽ之 弐十貫
九人馬上一騎 ○三十貫文十人馬上弐騎 ○四
十貫文十五人馬上弐騎 ○五十貫文二十人馬上
三騎 一人ニ付三百文 二十人ニ付六貫文なり ○六十貫文弐十五人馬
上三騎 ○七十貫文三十人馬上四騎 ○八十貫文
四十人馬上四騎 ○九十貫文五十人馬上四騎
○百貫文六十人馬上七騎 一人ニ付二百五十文 六十人ニ付十五貫文なり
○二百貫文百五十人馬上拾二騎 ○三百貫文
二百人馬上十六騎 ○四百貫文弐百五十人馬上
二十騎 ○五百貫文百五十人馬上五騎 一人ニ付三百文
以下ハ ○千貫文七百人馬上五十騎 十人ニ付三百文
七百人ニ 二百十貫文之
自国之軍役大概如此 創業十一 遠西

候ふハ大道小道共送る事なれとも大
界ハ二十里に一割引内外勘弁し取
法を絶すにハ徳共欲る事皆なれハ
先割合を立法令を崇にして是を
押（ヲサエ）へし千法百貫を領するの胡善
共営にハ角付十貫ほとの営にすれ荒
前貴共出ても衣食にたと帰へ入り起
その扱れハ先ん来て此曲なしとの割合を
立てそこ上に法令を崇ふして遠かる
ものとハ評さす定共通仕置すへし
又工業のもの為に割合のよくあれとも

就能を目当なしにハ難し然に銀之壱二
十万石共の目当を以書と云とも此は
割合の極界を記して平程を知るも
よの実割合をわけ家にありてハ能く考
志く一物一事悉く割合有ゆへ標
割合ハ志を強く術なり然るに今ハ勝
手より出る之鏡に大名の事共百
姓町人の事共ハ士百姓の事共と一統
事悉く割合の所にて以ハ其
昇沢新せすして費用をかさむ
其ことを割合の大意を為る中下下

Kitasato Memorial Medical Library

時武士の風俗ハ勝をもて依恃に執こ奉る
あり此故に無文制度を立る著を抑
へ貪を去りて武威を輝し能勤る
し武藝を励し武巻を嗜め於に仕
向け平生に時と武藝頭書して古流
無付しきを以すら心無ままと定まる時
ハ武術心動起すへし急事なる
○法令ハ其時の制度を建る是て依恃の制
度を破るハ依恃罪に行ふへしと定む
し一無て逃者ハ盗の罪に去る　法令
ハ通行へし　法令の法意なり　○衣

ムヽ法度ハ事に此事一之
古代衣服の定ハ冠婚喪祭平和
平常答堂ありと他所へ外出会と
云とも此制度を致事なれ従ふへ
罪すへし一事犯すし時ハ古法等ニ従ふ
よるなり
○家作は其程毎條に許して武門武士
華武華文ハ花若矢發張弓矢の制度
を定むへし
○婢女を召使ふ事も家作の事を定む
従ふへし

但子孫の為に妾を置ことハ格別之
名跡を継ぐ嫡子もなき時ハ　妾一人
に限るべし　若三年過て子なくハ又壱人置
べし子孫繁多なれバ妾に妾を置ぬ
事なかれ
○大小便をこらへて房事の精氣等結毒
神の祭日金臭土に合根有る數を禁ず
○青楼浜方なとの女子ハ或ハ純子天然の
類の妓婦の回年ホハ大抵毒有るもの
是等の婦ハ禁ず　対娘蒼容ホ十二割
房事なれども交接盛衰を筆
能依るもの是八章　能の法之天に桂章能八五六
らく　心緒を大名以下千國切手家切り
章　能ハ大路の心術に至る　その道り
術に五六十歳の命を持て交時ハ千國頭の
心得を論じ能よくなる　依役なり依道ハ
結依より依近ハ師の識依より依中て八深き緒
深く心得て定め頭之　妻女の能も誰すへ
依の依能ハ大小の深き法を以て切る
に其身を別なる精に定むも気　章
能なれ　億の定ての精を切る
千年をも目川事　是を能事の事定

ことに之剤をなすへし 但他の治法に節ハ相
二三をと施すも不効
所謂奥 此ノ嫁又ハ喜熟さし
其外此の薬無し 是と章脈絡意味
に後の事ハ固て経絡大小或ハ色異なる
別なしと事なし
○飲食も衣服と同じく治法を異なる
四時を以て一け一家より三宗迄治すへし
備ても治すへし 古より飲食に男女ハ
人の大欲なりとて病此謹を貪窮す
る食滋の篤をこれに以て る迄なるのあれハ

たん期を考て定むへし 但冠婚には親戚朋
友ハ他と共に循して 病新と喪葬には
夏は衣食を換て病家を安喪
葬とゆくへし 心飲食此など論する
あられたる此例之
右衣食の剤氣二三を挙て示すへし
精詳に工夫を加て損益斟酌しる
ハ之不此さしと其剤を定むるを刺ふ
る八代に此書修と兼る之王之
在之を此の遠例日も 将其氣効に
世能也仕以此の用に験て氣象と此もらん

Kitasato Memorial Medical Library

事なり 此事を云ざる事なれ
と我よりなすゑに 以新乳を避て
いふ宗と論本内家に先入まて無利風を
書要に移して 本内家識己に取り
其本の事をも去て 養心すとあるにある
其制ある事を述て 至後の事を論じ
人々に尋し 質非論を求しられる
を利よしつ
○古法制度よ他方へ任律書生也
諸気を類に出し 述なれ 虚説特純
脚の学指純して 又改事を忘

前々に 唯其人古法純然を述し たら
後もなく制度を建定めり 人全
なし 然々を令文 字気を述る法
数度と云 数度 制法を述べ 人を
て古法制度其純大意を出し 正斬に
千病を治す 上にも云しく 三才
の中まれ 道私 道私 去れ八哉
つ純大層 其に退 拓はなしと云ふ
日陽て人に示すん 其なるを 数言
なれども 日ある 哉を厚く 古列断
に至る領

Kitasato Memorial Medical Library

Kitasato Memorial Medical Library

Kitasato Memorial Medical Library